楠木正成～花は桜木、人は武士 2009/06/20 06:55

その純粋な生き様は、武士の理想像として、長く日本人の心に生きつづけた。

「日本人なら誰でも知っているこんな有名な話をいまさら紹介して、何考えているのだ」と言われそうですが、「七生報国」の楠木正成の物語です。どうも時局に対応したテーマでエントリーをあげていると、最近はネガティブな気持ちに陥りやすいので、**「出でよ！平成の楠木正成」**の気持ちもあります。

名将楠木正成の「七生報国の精神」は、太平記に語り継がれ、遙か後代の吉田松陰や坂本龍馬など幕末志士、そしてさらには特攻隊員に受け継がれていきます。お馴染み伊勢雅臣氏の「国際派日本人養成講座」平成14年10月27日の記事からです。時間があったら学生時代の復習のつもりでご覧頂けたら幸いです。

/_/　_/_/_/　_/　_/_/

■1．正成一人いまだ生きて有りと聞こしめされ候はば■

鎌倉武士の近ごろの悪逆非道ぶりは、すでに天道のとがを受けるほどでございます。その衰え乱れ、弱りはてたのに乗じてこれに天誅を加えるのに、何の困難がございましょう。ただ天下統一の業が成功するには、武略と智謀とのふたつが必要です。･･･

勝敗は合戦のつねでございますから、一時の勝負を必ずしもお気にかけられるには及びません。この正成（まさしげ）ひとりがまだ生きているとお聞きくださいましたら、帝の御運は必ず最後には開けるものとお考え下さい。

元弘元(1331)年8月27日、再度の倒幕計画が漏れ、後醍醐帝は奈良北東山中の笠置寺に逃れられた。そこで夢の中に大きな常磐木の南に伸びた枝が勢いよく張って、玉座を守っているという夢を見られた。木に南と書けば、「楠」となる。「このあたりに楠と称する武士はおらぬか」とお尋ねになって、早速召し出されたのが、河内の国金剛山の西麓に領地を持つ楠木正成であった。

すぐに参上した正成が、天下統一のための策略について問われ、申し上げたのが冒頭の答えであった。最後の一節のみ太平記の原文で味わっておこう。

正成一人（いちにん）いまだ生きて有りと聞こしめされ候はば、
聖運つひに開かるべしと、おぼしめ候らへ。

地方の一豪族からの天下の鎌倉幕府への大胆不敵な宣戦布告と言えよう。それから2年後の元弘3(1333)年5月の鎌倉幕府滅亡を経て、5年後の延元元(1336)年5月の湊川での自刃まで、正成のこの言葉通りの獅子奮迅の戦いぶりは、武士の理想像として、その後の日本人の心に長く生き続けた。

皇居前にある楠木正成公勇士の銅像

■2. 赤坂城の戦い■

笠置寺は幕府の京都数万の大軍に攻められ、後醍醐帝は幕府に捕らえられてしまった。正成は河内の領内に聳える赤坂山に城を構えて5百の兵とともに立て籠もって旗揚げしていたが、関東からはるばるやって来た数万の軍勢が残る赤坂城に迫った。

急拵えの赤坂城は堀も満足になく、わずか1，2町（1～2百m）四方にやぐらを2～30ほど建てただけの粗末なものだった。寄せ手は、せめて一日たりとも持ちこたえてくれれば、恩賞に預かれるものを、と願った。

寄せ手の侍千人ほどが崖をよじ登り、塀にとりついて乗り越えようとした所、塀が倒されて崖下に転げ落ち、さらに上から大木大石を投げられて、7百余人が討たれてしまった。塀は二重になっていて、外側は見せかけだったのである。

翌日は用心して残る塀に熊手を投げかけて破ろうとした所、上から長いひしゃくで熱湯をかけられ、2、3百人が負傷した。寄せ手は攻めあぐんで、兵糧攻めに切り替えた。包囲が20日も過ぎると、正成は城内に大きな穴を掘り、先の戦いで塀の中で倒れた2、30の死体を中に入れて、10月21日の風雨の夜に城に火を放って、脱出した。

「城が落ちたぞ」と勝ちどきを上げて、城内になだれこんだ寄せ手は「なんと哀れなことだ。正成はとうとう自害して果てた。敵ながら弓矢とる武士として立派に死んだものだ」と褒め称えた。

■3. 正成、再起■

こうして死んだと思われていた正成が突如、姿を現したのは、それから1年以上も経った元弘2年12月であった。すでに後醍醐天皇は隠岐に流され、側近たちの多くも死罪流罪に処せられていた。

そこに突如現れた正成は近隣の幕府方地頭を襲い、降伏した武士たちを自軍に従えた。さらに年が改まると、紀伊や河内和泉の幕府方所領を襲って、降伏するものはすべて麾下につけ、たちまちに2、3千騎の勢力に膨れあがった。正月19日には難波にまで進出して、幕府方5千の軍勢をさんざんに破った。

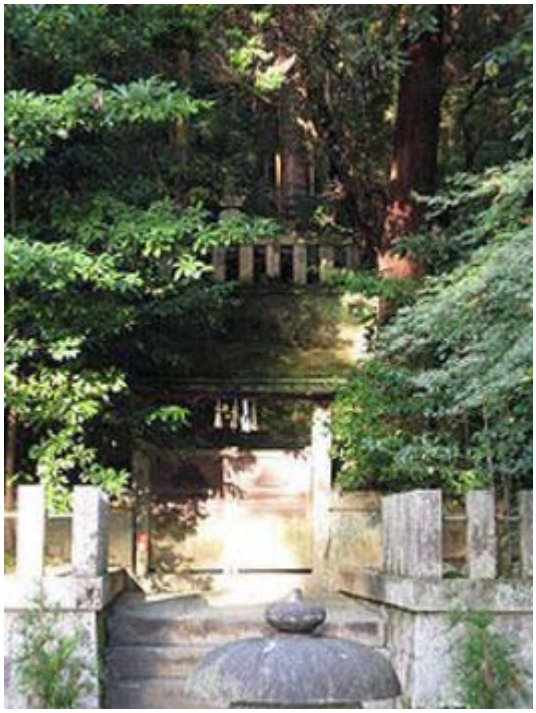
正成は謀略の面でも優れた才能を発揮した。近畿の交通の要所にはそれぞれ数名単位の山法師姿の部下を送り、聖徳太子の「未来記」には、「後醍醐帝が戻られて幕府が滅びる」と予言されている、と触れ回らせて、人心を動揺させた。

■4. 天嶮・千剣破城■

正成の再起に、鎌倉方は動揺した。ほっておけば、幕府に不満を持つあちこちの輩が蜂起して、手に負えなくなるであろう。そうなる前に正成を討たなければならない。幕府は5万の大軍団を正成討伐のために送り込んだ。

正成はかねて準備していた千剣破（ちはや）城に立て籠もる。赤坂城からさらに10キロもの山奥にある金剛山の支峰であって、四方を50mから100mの深い断崖に囲まれた険阻な孤峰であった。周囲4キロばかりの頂上に、本丸、二の丸、三の丸、四の丸と階段状に何重もの砦が築かれていた。

食糧は十分貯え、空き地には野菜を作ってある。水は自然の湧水以外にも、大木をくりぬいた水槽を2、3百も作って、陣屋の雨樋から雨水を貯めこむ。籠城が何百日続こうと、水と食糧に関しては困らない用意が出来ていた。



観心寺（大阪府河内長野市）にある楠公首塚

■5. 千剣破城の攻防■

このような奥まった所に、5万もの大軍が津波のように押し寄せ、周囲4キロにも足りぬ孤峰をぐるりと取り囲んで、千剣破谷を埋め尽くした。先手の一群が、まるで蟻の大群が砂山を登るように、びっしりと崖一面を埋め尽くして這い登り始めた。

しかし城中からは何の防戦もしてこない。やぐらに翻る楠木の菊水の紋がはっきり見える所まで近づいて、「よし、一番乗りじゃ」と言った所で、大岩数十個が土煙を上げて転がり落ちてきた。

わざと各所に登りやすそうな道筋を拵え、そこに大岩を貯めておいたのだから、たまらない。圧死し、あるいは負傷した者の数は6千人にも上ったという。寄せ手は警戒して、兵糧戦に出た。城内から必ず水を汲みに降りてくるだろうと、名越（なごや）越前守が手勢3千人で近くの谷川に陣を張って待ちかまえたが、一向その気配がない。3日経って気も緩んで寝込んでいる所を、早朝の濃霧に紛れて、正成の手勢が急襲した。

たちまち数百人の死傷者が出て、他のものは命からがら逃げ延びた。その後、城中のやぐらに名越の紋所を染めた旗が立って、「やよ、寄せ手の方々、これこそ名越殿より頂戴つかまつった旗でござる。名越家の方々、これへおいで候うて、お持ち帰り願いたい」と大音声で呼びかけて来た。

名越越前守は「たとえ一族全滅するともこの恥辱をそそがぬわけには参るまい」と、大将以下5千人がまたもや断崖を上り始めた。そこに今度は直径3尺（1m）もありそうな大木が何十本となく降ってきて、4、5百人が押しつぶされ、浮き足だったところを上から矢が降り注いで、大半が討ち取られてしまった。

■6. 兵糧攻め、梯子攻め■

寄せ手は再び兵糧攻めの戦術に戻った。しかしいまだ4万もの大軍である。持参した米俵が次第に乏しくなってきて、河内の国のあちこちで現地調達をしようとしたが、売ってくれる者がいない。すでに正成によって買い占められていたのである。

やむなく、隣国の大和の国で糧食を調達して、千剣破まで運ぼうとすると、正成のあやつる山伏などに襲われる始末。かえって包囲している幕府方の方が、兵糧不足で苦しめられることとなった。

そこへ鎌倉の執権から急使が来て、「怠けておらず早々に城を攻め落とせ」という叱責の声が伝えられた。単なる力攻めでは犠牲を重ねるだけだ、何か良い戦術はないか、と軍（いくさ）評定をしていると、中国の戦史に出てくる雲梯（うんてい、雲のかけはし）を作って、直接山上に突入しようという案が出た。移動式の巨大な梯子（はしご）なら、どこに架けるか分からないので、敵も大石や大木を準備する時間がないはずである。

早速、京から5百人ばかりの工匠を呼び寄せ、幅1丈5尺（4.5m）、長さ20丈余（60m）もの大梯子を作らせた。それを何十本という太綱で吊り上げ、木車を使って、絶壁にかける。「それっ」と寄せ手が一気に駆け上がろうとした所を、城内から大きな水鉄砲で油を浴びせかけた。滑って転落するものが続出した。そこに城内から火矢が浴びせかけられて、雲梯はたちまち燃え上がって、寄せ手の勇士たちを炎で包んでしまった。

湊川神社（兵庫県神戸市）にある墓碑（嗚呼忠臣楠子之墓）画像はいずれもＷＩＫＩから。

■7. 各地で宮方の旗揚げ相継ぐ■

しかし、こうしていくら堅固な城に立て籠もっていても、いずれは大石・大木も無くなり、矢種も尽き、食糧も食べ尽くしてしまう。籠城戦には時間を稼ぐことで達成される戦略目的がなければならない。

正成は千剣破城で、じっと待っているものがあった。これだけの幕府の大軍が、千剣破城に集結している事で、日本の各地の防御は手薄になる。そこを狙って、後醍醐天皇に心を寄せるもの、幕府に恨みを持つものが立ち上がるに違いない、というのが、正成の籠城戦に出た読みであった。

幕府方の大軍が攻め寄せたのが2月22日だったが、その翌日、山陰地方の交通交易を握って隠然たる勢力を持つ名和一族が後醍醐帝を密かに隠岐の島から救出して、船上山に設けた行在所（あんざいしょ）にお迎えしたという急報が届いていた。

雲梯が燃え上がった数日後には、帝をいただいた東征軍が京への進軍を開始したという知らせが届いた。また播磨の国で宮方の命を受けた赤松則村の軍勢は、幕府軍を打ち破って、京都に迫った。四国では伊予の豪族・土居道増、得能通綱が兵を挙げて、瀬戸内海の航路を押さえた。こうして西国での宮方の旗揚げが続くと、千剣破城を包囲していた幕府軍にも動揺が広がった。

■8. 鎌倉幕府滅亡■

この中で宮方の勝利に決定的な働きをしたのが、足利高氏であった。足利氏は代々、将軍家・北条氏と婚を通じ、幕府における最高の一族として遇せられていたが、源頼朝の系統が絶えて後はほとんど唯一の源氏の嫡流であり、代々天下を取ることの宿願としていた。

赤松の軍が京都に迫って、高氏は京の防衛を命ぜられたが、後醍醐天皇に使いを派遣して帰順を誓い、密書を各地の豪族に送って協力を求めた。そして赤松と連携して、京都六波羅の幕府の館を襲って、討ち滅ぼした。

六波羅陥落の報が届くと、千剣破城を包囲していた幕府軍は退却し、正成の軍はここに百日以上に及ぶ籠城から解放されて、今度は意気盛んに追撃戦に入った。

さらに関東では、これまた源氏の一族、新田義貞が兵を挙げて、鎌倉を襲った。これにより、鎌倉幕府150年、北条氏9代の権勢は滅び去った。

■9. 正成の一途さ■

わずか千人程度の手勢で、幕府数万の大群を千剣破の山奥におびき寄せ、百日余にわたる籠城を成功させた正成は、まさに天才的な武将と言うべきであろう。
しかし、それよりも顕著なのは、時代の趨勢を見通す政治的見識であった。北条氏が元寇の際に示した無私な為政者としての姿勢を失い、尊大にして富貴に驕（おご）り、その政治は腐敗して公正を失っていた。天下の人心は鎌倉幕府から離反して、政治の刷新を期待していた。

正成はこの情勢を正確に見通していた。笠置寺に逃れられた後醍醐帝の召命に即座に応じ、帝が隠岐に流されて、倒幕の見込みもまったく失せたと思われた時にただ一人反抗の狼煙を上げたのも、この正確な情勢判断があったからであった。

しかし、正成がその後の日本人の心に長く生き続けたのは、その軍事的才能と政治的見識もさることながら、自らの名誉も富も顧みることなく、後醍醐帝に仕えた一途さにあった。

埋もるゝ身をばなげかずなべて世のくもるぞつらき今朝の初霜

とは、後醍醐帝が隠岐に流された時の御歌であろう。遠島に埋もれる御身よりも、世の曇りがつらいと、ひたすらに民を思う後醍醐帝の大御心に仕えまつることこそ、乱れた世を直し、民の安寧を実現する道と正成は信じたのであろう。

■10. 七生報国■

後に、高氏が後醍醐帝に背き、九州に落ちた時、正成は高氏との和解を勧めた。源氏の頭領として、やがて高氏が権力を握るだろうとの、これまた正確な情勢判断だった。この献策が入れられず、京都に迫る高氏の軍を、正成は兵庫・湊川にて迎え撃つ。それは死を覚悟した戦いだった。

もし正成が名利を思ったら、この時に高氏について、室町幕府の大豪族として、栄華富貴は思うがままであったろう。しかし、正成の誠忠はそれを許さなかった。数万の高氏の軍と6時間余に渡る激戦を続けた後、正成は弟・正季と差し違えて自刃する。二人がからからと笑いながら交わした最後の会話は、次のような内容だった。

七生までただ同じ人間に生まれて、朝敵（朝廷に敵対するもの）を滅ぼさばや（滅ぼしたい）とこそ存じ候らへ

この七生報国の精神は、太平記に語り継がれ、遙か後代の吉田松陰や坂本龍馬など幕末志士、そしてさらには特攻隊員に受け継がれていく。正成の国を思うまごころは幾たびも日本人の心の中に生まれ変わってきたのである。

（文責：伊勢雅臣）

それでも「民主党」ですか？

●1/3【小坂実】民主党基本政策の「暗部」[桜 H21/3/12]

●2/3【小坂実】民主党基本政策の「暗部」[桜 H21/3/12]

●3/3【小坂実】民主党基本政策の「暗部」[桜 H21/3/12]

●在日コリアン達の本格的な日本侵略がはじまっていることに気づいて下さい　　（ねえ、知ってたあ！）

●日本もこうあって欲しい　Best Commercial Ever

●NHK集団訴訟にご協力を！22日期限です　！

カテゴリ：政治も　フォルダ：指定なし　コメント(4)

コメント(4)

コメントを書く場合はログインしてください。

Commented by 花うさぎ さん　2009/06/20 07:54

・イベントガイド

士気の集い・青年部 講演会
「朝鮮で聖者と呼ばれた日本人 重松鼾修と日韓併合から百年」

日時　平成21年7月11日（土）　講演会 18時00分～19時45分（17時45分開場）
懇親会 20時00分～22時00分

場所　文京シビック 3階 第1会議室（文京シビックセンター内）
文京区春日1-16-21　TEL 03-3812-7111
東京メトロ丸の内線・南北線「後楽園」駅 徒歩1分、都営三田線・大江戸線「春日」駅 徒歩1分
内容　講師：田中秀雄（日本近現代史研究家・映画評論家）
演題：朝鮮で聖者と呼ばれた日本人 重松鼾修と日韓併合から百年
参加費　講演会　1,000円　事前申し込みの女性・学生 500円
懇親会　3,800円　事前申し込みの女性・学生 3,500円
お申込　7月10日までにメールまたはFAXにてお申し込みください（当日受付も可能）。
FAX 03-5682-0018　MAIL morale_meeting@yahoo.co.jp
※ 定員60名につき、先着順とさせていただきます。また、会場の都合により、
懇親会参加者は必ず事前にお申し込みください。
主催　士気の集い・青年部　TEL 090-3450-1951

Commented by 花うさぎ さん 2009/06/20 10:03

・お知らせです。

「日本再興 西村真悟 夏の集い」

日　時：7月12日（日）午後2時ー午後4時（開場：午後1時）
場　所：「泉ヶ丘ビッグ・アイ」 住所：大阪府堺市南区茶山台1－8－1
　　泉北高速鉄道「泉ヶ丘駅」下車徒歩1分
登壇者：西村真悟、渡辺秀央（改革クラブ代表）、平沼赳夫（元経済産業大臣）
　　田母神俊雄（元航空幕僚長）、横田めぐみさんご両親、有本恵子さんご両親
会　費：無料
問い合わせ：改革クラブ衆議院大阪第17支部　TEL：072－277－4140

＊入場には「入場整理券」が必要です。当日12時より会場前にて配布させていただきます。
＊ロビーにて1時から5時まで「拉致救出写真展」並びに「拉致救出ビデオ」の放映を行います。
＊登壇者及び内容等は政局により変更される場合がございます。

Commented by 元気 さん 2009/06/20 12:37

To　花うさぎさん

嬉しい。大阪ですね。

頑張って（早く行って）、「入場整理券」ゲットします。(^^)v

Commented by 花うさぎ さん 2009/06/20 20:44

To　元気さん こんばんは。

＞頑張って（早く行って）、「入場整理券」ゲットします。(^^)v

あの～、ついでにお願いが。

私は西村慎吾氏は楽勝かと思っていたのですが、意外と苦戦という情報も伝わってきました。あわてて日本再生同士の会の正会員となったのですが、是非とも彼を支援して下さい。

本当に男の中の男、清貧な憂国の士ですので(--)。